雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会統一見解

平成6年2月7日
気　　象　　庁

雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連絡会の統一見解

雲仙岳では，昨年11月から本年1月にかけて活発な地殻変動と地震活動があり，溶岩ドーム付近の岩盤及び溶岩ドームの一部は南西に大きく押し出され，多数の地割れや断層が形成された。また地震が多発し，約4km離れた雲仙岳測候所でも有感となった。このような大きな変動は1991年5月に最初の溶岩ドームが出たとき以来初めてであった。この一連の現象は供給されたマグマが溶岩ドーム表面に出られず，火道最上部の岩盤を南西方向へ押したためと考えられる。

1月15日には溶岩ドームの頂部で第12溶岩ドームが成長を始め，やがて1月下旬から南東方向へ崩落が始まり，2月2日から3日にかけては多数の火砕流が赤松谷へ最長3.5km流下した。また，2月6日には初めて北方向へ火砕流が流下した。

これまでの約3年間の経過を見ると，溶岩の組成，溶岩の噴出様式，火砕流の態様，火山ガス放出量等に大きな変化はない。溶岩噴出量は1991年に比べれば低下しているものの，昨年2月以降は数万～30万m^3／日程度の幅で増減を繰り返している。今までの総噴出量は1億8千万m^3程度と見積られる。地殻変動観測では，溶岩噴出の増減に対応して変化しつつ西山麓を中心に収縮する傾向が観測されている。

雲仙岳は今後も消長を繰り返しつつ，従来と同様の形態，規模の噴火活動を続ける可能性が高いと考えられる。今後も大きな火砕流の発生等火山活動に警戒が必要であり，特に当面は第12溶岩ドームの成長とそれに伴う崩落に警戒が必要である。

なお，降雨による土石流にも引き続き警戒が必要である。